

平成 30 年度
研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第407集 寺家 佳織

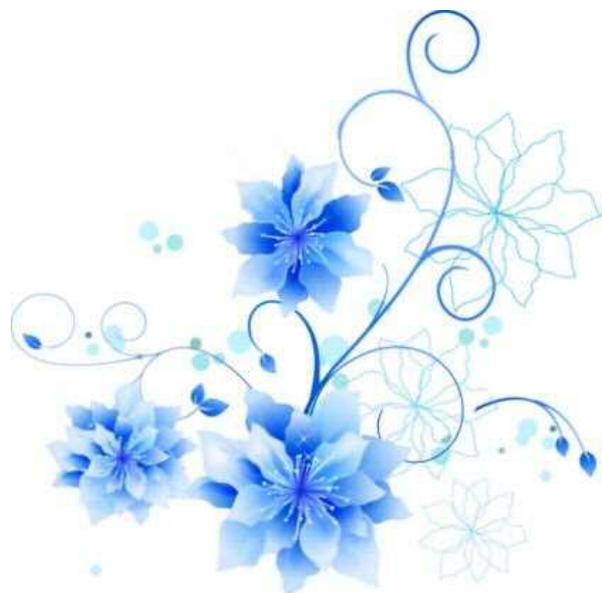
自ら考え、議論する道徳の指導に関する研究
— 意見や議論の可視化に重点をおいて —

第408集 山田 裕美

中学校数学科における問題解決能力向上のための授業づくりに関する研究
— フィードバックに重点をおいて —

第409集 鳥居かおり 北保絵美 宮崎久美

小学校における不登校の未然防止に関する一考察
— 日常場面に生かすストレスマネジメント教育を通して —



1 研究の目的

意見や議論を可視化させながら考え議論する道徳の授業を展開することが、多面的・多角的な思考を促すとともに、道徳的価値「相互理解、寛容」の理解を深めることにつながるかを検討する。

2 研究の内容と方法

(1) 教材について

教科書に掲載されている「相互理解、寛容」の内容項目に関わる読み物教材を取り上げた。教科書下段に提示されている「考える投げかけ」を用いた、問題解決的な学習の授業を展開した。

(2) 自ら考え、議論するための授業の流れ

問題解決的な学習を通して、子どもたちが道徳的な問題を多面的・多角的に捉え、主体的に考える資質や能力を養える授業の流れを設定した。

授業は、課題について道徳ノートや個人用ホワイトボードに自分の考えを記述させる「一次思考」、ホワイトボードを用いて少人数で議論する「相互参照①」、クラス全体で意見を共有し、話し合いに深まりを持たせる「相互参照②」、全体での意見をもとにもう一度個人で思考を巡らせ、道徳ノートに考えをまとめさせる「二次思考」の流れを基本とした。

(3) 考える場面と議論する場面での手立て

個人思考の場面では、道徳ノートや個人用ホワイトボードに自分の考えを記述させ、これを議論した後、個人思考を比較するときに活用させた。

議論する場面では、ウェビング法やそれを発展させた方法を用いて、班用ホワイトボードに意見を可視化させながら議論させた。班用ホワイトボードは、個人思考の道筋がたどれるものとして、全体交流の時に活用させた。

(4) 全体交流

班での議論後、班用ホワイトボードを用いて、個人の意見を発表させた。全体で話し合うことで、更に個人思考を深めることにつながった。

(5) 効果の測定

意見や議論の可視化を目指して授業を行ったクラス（以下「可視化クラス」と、やり取りを中心とした話し合いの授業を行ったクラス（以下「や

り取り中心クラス」）のそれぞれの子どもたちを児童・生徒用に改定された批判的思考態度尺度と批判的学習態度尺度を用いて、批判的思考（学習）スキルの高低に分類した。このグループ分けを用いて、議論する場面における子どもたちの発言と、課題に対する振り返りの文章の量や内容についての比較・分析を行った。

3 研究のまとめ

(1) 多面的・多角的な思考が促されたか

発言量や内容を見ると、可視化クラスでは、他者の意見も取り入れながら個人の思考をさらに深めることができたため、批判的思考（学習）スキルの高低に関わらず、やり取り中心クラスより発言文字数の平均も多く、内容も結論に至るまでの思考を順序立てて発言する姿が見られた。

相互参照の中で可視化を行うことで、課題を多面的・多角的に捉え、個人思考と相互参照から得た考えを統合し、さらに思考することにつながったと考えられる。意見や議論を可視化させることは、批判的思考（学習）スキルの低いグループにとっても、個人の思考を整理したり、他者の意見をもとに見る立場を変えたり、自他の思考を比較したりすることにつながると考えられる。

(2) 「相互理解、寛容」の理解の深まり

振り返り文章の内容を見ると、批判的思考（学習）スキルの高いグループでは、「価値理解」や「自己理解」について考えたことや感じたことについて書いた子どもの割合が、やり取り中心クラスより可視化クラスの方が高くなった。これは、意見や議論を可視化させることで、個人の意見だけでなく他者の意見も取り入れながら自分の意見を整理することになり、結果として「相互理解、寛容」の価値を理解するとともに、自己を見つめながら振り返り文章を書く姿につながったからだと考えられる。

また、可視化クラスは批判的学習スキルの低いグループでも、「価値理解」について書いた子どもの割合が高かった。意見や議論を可視化させることは、教材文を通して、道徳的価値を広く深く考えさせるだけでなく、課題を自分と結びつけて考えさせる手立てにもなると考えられる。

1 研究の目的

関数の学習で問題解決能力を高めるために、フィードバックを工夫し、生徒に与える影響を明らかにする。知識・技能の定着を主な目的とした部分では、小テストに取り組み、自己採点によるフィードバックを行うことで、多くの生徒が一定レベル以上になることを目指す。また、思考・判断を主な目的とした部分では、小テストの採点方法を変え、どのようなフィードバックが効果的かを明らかにする。数学に対する意識に与える効果についても明らかにする。

2 研究の内容と方法

(1) フィードバック

問題解決能力を高めるために、授業で学んだ知識・技能、解決方法などを確実に身に付けることは必要不可欠である。それらを身に付けることで、新たな問題に出合ったときに、これまでに学んできたことを活用することができる。そこで、毎時間の最後に小テストを実施した。自己の到達状況を知ることで、次に行うべきことが明確になり、学習の促進につながると考えた。

【表1】 フィードバックの方法

方法	内 容
相互採点	隣同士で答案用紙を交換し、模範解答を見ながら採点する。その後、生徒同士で教え合ったり、聞き合ったりできる共有の時間を設ける。つまづきが多い問題は、教師が全体に解説する。
教師採点	答案用紙を回収し、模範解答を配る。採点は教師が行い、次時の授業の最初に返却する。
自己採点	模範解答を見ながら、自分で採点する。

(2) 問題解決学習の工夫

関数の学習では、日常生活や社会の事象などの具体的な場面で関数を活用することが求められている。そこで、「一次関数の利用」では、日常生活のなかにある問題を取り上げ、四日市モデルのプロセスを取り入れた問題解決学習を行った。教具やICTを活用することで、生徒が問題解決の見通しを持って主体的に取り組むことができるようにした。

(3) 効果の測定

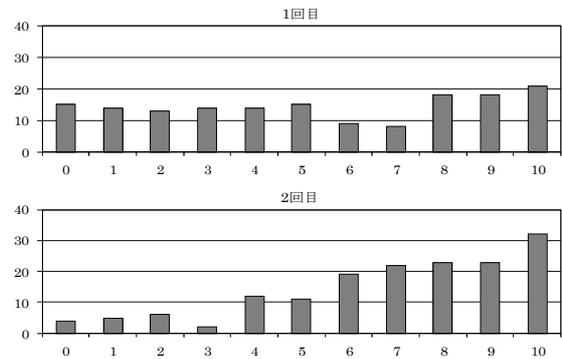
4回のテストと意識調査のデータを収集し、問題解決能力を高めるための効果的なフィードバ

ックの検証と数学に対する意識の変化について分析を行った。

3 研究のまとめ

(1) 知識・技能の定着

知識・技能の定着を主な目的とした授業の前後で行ったテストを比較すると、平均点が伸び、6点以上の生徒の割合が増加した【図1】。自己採点によるフィードバックにおいて、必要とする情報を受け取り、次に行うべきことが明確になったと考えられる。その結果、関数に関する知識・技能の定着を図ることにつながったと考えられる。



(2) 数学に対する意識の変化

「既習事項の活用」や、「自分の考えを深めること」ができるようになったと回答する生徒の割合が増加した。また、「関数の学習が好きだ」「関数の学習ができるようになりたい」という意識の高まりも見られた。知識・技能の定着を図ったことで、肯定的な意識が高まったと考えられる。

(3) フィードバックの効果

思考・判断を主な目的とした授業では、フィードバックの方法を【表1】のように分け、その効果を検証した。その結果、相互採点によるフィードバックは基礎的な内容の習得に向いていて、自己採点によるフィードバックは応用的な力を高めることに向いていることが示唆された。また、相互採点や自己採点によるフィードバックは問題解決能力の高まりに有効であることも示唆された。よって、生徒の実態や問題の特質によって、フィードバックの方法を工夫することで、より学習の効果を上げることにつながると考えられる。

【研究報告 第409集】 概要版

小学校における不登校の未然防止に関する一考察

－ 日常場面に生かすストレスマネジメント教育を通して －

四日市市教育委員会教育支援課 適応指導教室 指導員 鳥居かおり・北保絵美・宮崎久美

1 研究の目的

不登校を未然に防止するために、小学校でストレスマネジメント教育の授業を実施する。授業によって児童のストレスに対する理解が深まるか、児童のストレスが軽減するか、また、学んだことを日常生活でも生かすことがさらにストレス軽減に効果があるかを検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 研究対象

本研究では、中学進学時でのストレスに対処できる力をつけることが不登校の未然防止につながると考え、対象を小学6年生とした。

(2) 研究の内容

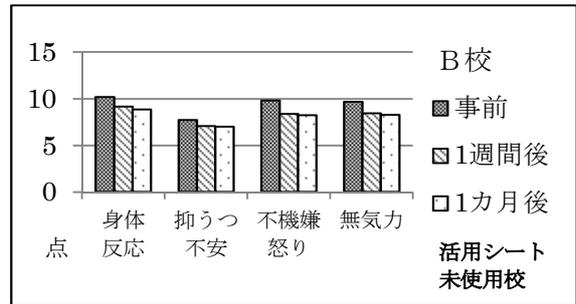
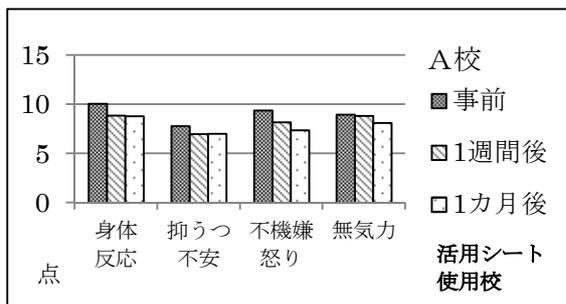
市内の研究対象校、2校にストレスマネジメント教育の授業を2時間実施した。1時間目は、四日市市早期支援ネットワーク（YESnet）の出前授業を活用し、心と体の健康とストレスについて、2時間目は、ストレスを軽減するコーピングについて学ばせた。2回の授業を受けた後、1校では、学んだことを日常生活に生かすための活用シートを使用し、授業後も児童にストレスマネジメントを行わせた。

(3) 検証の方法

授業前、授業1週間後、授業1カ月後にアンケートを実施した。授業による効果を検証するため、授業前後で変化があったかを分析した。また、日常場面でのコーピング活用の効果を検証するため、活用シート使用の有無により2校間に差があったかを分析した。

(4) 研究の結果

ストレス反応尺度の結果から、2校とも授業後にストレスが軽減されていることがわかった。



また、1カ月後は、B校よりもA校の方がストレスがより軽減されていることがわかった。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

授業後のアンケートから、授業内容は小学6年生にも十分理解できること、授業後の感想からストレスについての理解が深まったこと、授業で学んだことを日常生活でも活かそうとしていることが明らかになった。また、授業後には、自分のストレスの状態を正しく理解できるようになっていた。

分析結果からは、ストレスマネジメント教育の授業実践は児童のストレス軽減に効果があること、活用シートを使用し日常場面でもストレスマネジメントを行うことがさらにストレス軽減に効果があることが明らかになった。

(2) 課題

今回の研究では、ストレスマネジメント教育の授業実践や活用シートの活用によって、さまざまな効果があることが明らかになった。

しかし、中には授業後もスキルが身につけにくく、ストレスが軽減されなかった児童もいた。スキルが身につけにくい児童は、今後もさまざまな場面で躓いたときストレスを強く感じることを予想される。このような児童を不登校のリスクがあるととらえ、児童の情報を収集し、継続的に支援を行う必要がある。

不登校を未然に防止するためには、ストレスマネジメント教育の授業によって児童が自らストレスに対応できる力をつけさせると同時に、授業後もスキルが身につけにくかった児童を抽出し、継続的に支援していくことが必要であると考えられる。



平成30年度研究調査報告【概要版】

発行 平成31年3月

発行者 四日市市教育委員会教育支援課

〒510-0085 三重県四日市市諏訪町2番2号

電話番号 / 059-354-8149 FAX / 059-359-0280

E-mail / kyouikushien@city.yokkaichi.mie.jp

